

言語文化論集 第45号 抜刷

1997年7月31日

舟なき航跡としての生
——メルロ＝ポンティにおける生命科学——

廣 瀬 浩 司

筑波大学 現代語・現代文化学系

舟なき航跡としての生

——メルロ＝ポンティにおける生命科学——

廣瀬浩司

Il (=le poète) est chargé de l'humanité, des *animaux* même ;
il devra faire sentir, palper, écouter ses inventions.

Rimbaud

1. 根元的自然への回帰？

1956年のパリのコレージュ・ド・フランスという場において、自然の概念について講義を始めることは、多くの聴講者にとって衝撃的なことであつたに違いない。当時アクチュアルであつた主題は、人間や労働であり、歴史の意味であり、弁証法であつた。自然や生命について語ることは、歴史の問題の放棄ではないのか。すでに1955年に『弁証法の冒険』を出版してサルトルを批判していたメルロ＝ポンティは、歴史の暴力を廃棄するような全体性に、ノスタルジックに回帰しようとしているのだろうか。

だが、このことにおそらく誰よりも自覚的であつたメルロ＝ポンティは、講義の要約の冒頭で次のように記している。

今年の——さらには来年の——講義の主題として自然の概念を選ぶことによって、われわれは時代遅れなテーマを重視しているように見える。しかし(・・・)自然哲学に帰ることによって、[精神、人間、歴史といった]主要な問題から離れてしまっているように見えるのは見かけだけにすぎない。われわれが求めているのは、非唯物論的ではないような解決を準備することなのだ¹⁾。

この発言からもわかるように、自然の概念を導入するのは、当時のマルクス主義やサルトルが、自然哲学を等閑視したために陥ってしまった思想的危機から脱出するためであつて、それ以上のものでもそれ以下のものでもない。このことを十分に念頭に置いておかなければ、メルロ＝ポンティの晩年に至る思想

の射程をとらえそこなってしまうだろう。彼の意図は——たとえばかつて「現前の形而上学」の批判の立場から言われていたように——、自然との「原初の契約に忠実であること」²⁾のみを、それ自体で追求することではない。メルロ＝ポンティは、自然の概念が解決のための副次的な要素でないことを強調しながらも、同時に「それだけでは問題の解決ではない」(RC, 92)ことを確信しているのだから。

こうしたメルロ＝ポンティの問題提起を、脱構築的な身ぶりて故意に単純化し、「根元的自然の(・・・)善意」³⁾への忠実さなどと要約してしまうことは、それ自体では観念論的な立場による批判の繰り返しにすぎず、新たな地平を開くための道をあらかじめ閉ざしてしまうことだ。そればかりではない。こうしたほとんど観念論的な批判を過度に強調することは、その反動として、極度にナイーブな自然主義や有機体論の復興をもたらしかねないだろう。だからこそ、メルロ＝ポンティの批判者たちは、自然が「つねに狂いうるもの」であることを、あたかも強迫観念(hantise)のごとく、抽象的に要請せざるをえなくなる(cf. RC, 93)。しかし、自然が「狂いうるもの」だとしたら、そのような可能性をはらんだものとして、自然を記述することから始めるべきではないのか。メルロ＝ポンティの自然についての慎重な記述を放棄して、暴力の「否認の深度を測りうる『構想力!』」⁴⁾を練り上げることなどできるのだろうか。脱構築の仮面をかぶった、このような観念論的な批判こそ、「絶対的『他者』に出会いたいという古い欲望とそれにつきまとう古い恐怖」(RC, 145)の表れであり、この欲望と恐怖を自然に投影することなのではないか。要するにこれは、裏返された人間中心主義なのではないだろうか。メルロ＝ポンティ自身の言葉を無視してまで、彼の哲学を形而上学に押し込めようとする動機には、こうした転倒した人間主義があったのではないか。

とは言え、メルロ＝ポンティの自然についての思索の意味を理解するのがこれまで困難であったのはたしかである。コレージュ・ド・フランスの自然講義は簡潔なレジュメによってのみ知られ、しかもその内容は難解きわまるものである。その意味では、1995年の「自然」についての講義ノート(メルロ＝ポンティのメモと聴講者のノート)の出版の試みは、画期的な意味を持つと言えよう。この書は文献学的には多々問題をはらんでいるが⁵⁾、メルロ＝ポンティの講義の現場を生々しく伝えてくれている。

以上を踏まえ本稿では、彼が現代生物学の提起する問題について論じている箇所を中心に、その哲学的意味をさぐることにしよう。ただし、メルロ＝ポン

ティが論じている生物学それ自体は現代ではすでに古いものが多いので、その具体的な紹介は、1957年から58年の講義で論じられている、G. E. コグヒルの研究にとどめておく⁶⁾。

2. 生——機械論と生氣論の間で

1957年から1958年に行われた「動物性、人間の身体、文化への移行」と題された講義の後半で、メルロ＝ポンティは今日の生命科学を検討し、そこに内在する存在論を明るみにだそうとする(RC, 132)。始めに取り上げられるのは、すでに最初の著作『行動の構造』の主要なテーマでもあった行動概念である。

『行動の構造』でも論じられていたことだが、行動概念はいわゆるワトソン主義においては、反メンタリズム的な心理学の視点から導入されていた。しかし、この概念はしだいにワトソン主義の枠組みを逸脱し、意図の概念などとも組合わさって、行動自体が「ほとんど有機体的な実在」(NA, 188)とみなされるようになるという。

彼の講義に沿って例をひとつ挙げよう。コグヒル(G. E. Coghill)は、アホロートル(山椒魚の一種)の幼生の発生のプロセスを研究した。アホロートルは、まだ水中にいる時には、オタマジャクシのような形態で泳いでいるが、脚の発達とともに陸上で歩行するようになる。その解剖学的な発達(頭、尾、脚などの分化過程)と運動性(頭を振りながらの胴の運動による泳ぎ、円環状の泳ぎ、S字型の泳ぎ、前脚、次いで後脚による地上歩行など)の関係を研究した結果、コグヒルは、行動の発達のプロセスが、解剖学的な諸部分の加算的な総和ではなく、つねにグローバルな構造に統合されていることを主張するに至る。たとえば水上から陸上に上がったばかりのときには、まだ前脚しか発達しておらず、その運動も胴の運動に統合されてしまっている。歩行はまず、泳ぎの延長上に開始されるのである。それから後脚が発達し、「しだいしだいに」(NA, 190)胴の運動が排除されていき、歩行らしい歩行が行なわれるようになる。要するに有機体は、部分的な反応を全体的な行動に結びつけながら、環境に適應した行動のかたちを、動的に組織していくのである。

解剖学的な部分や神経系の発達が、グローバルな行動に対して持つ、複雑な相互関係を考察した結果、コグヒルは「勾配 (gradient)」という概念を導入するに至る。勾配とは、環境への反応の強度に従って秩序づけられた、色価のようなものである。動物の行動は、前神経的な勾配によって組織されており、神

経系はこの前神経的な力学から「発生する (émerger)」(NA, 192)。前神経的なシステムは神経的な機能を「またぎ越し (enjamber)」ており、神経系の発達後も働き続けるのである。

このような考察を延長するならば、「成長の内的なポテンシャルや、環境に有機体のごとくに反応するダイナミックなシステム」(NA, 192)のようなものを認めなければならなくなる。行動の発達は、ある自己規制的な (auto-régulateur) システムが、そのつど与えられた「課題」を、ゆらぎながら「解決」していくプロセスとして記述される。神経系はこのプロセスの結果ではあっても原因ではないのだ。

こうした「動的な形態学」(NA, 197)によれば、動物の行動は機能の束や生理学的な活動に還元されるものではなく、「未来へのレフェランス (référence à l'avenir)」を備えている。有機体は行動という「可能態 (possibles)」をはらむように見え、行動のほうは、有機体のごとくに自己生成していく。「有機体とは、未来における行動と同義である」(NA, 198)。それはあたかも、「生物学的な組織化の諸段階が、有機体が果たすべき課題を素描している」(NA, 190)かのようなのだ。

このような主張は、生氣論 (vitalisme) 的なものと思われるかもしれない。しかし、メルロ＝ポンティが指摘しているように、かならずしもそうではない。まず、「勾配」や「課題」といった用語は、いわば細部の記述に忠実であろうとするために要請されたものにすぎず、人間的なものの動物への投影ではない。現象として観察されることは、動物の身体の諸部分が、その相互的な関係において一種の時間性をはらんでいるように見えるということ、そして、この時間的なプロセスにおいて、動物がそのつどの環境に自己規制的に適応し、新たな行動を発明する、ということなのだ。行動は「反物理的ではないが、物理的なものとは違うもの」(NA, 300)として、成長のプロセスを統御している。それは一方では、身体の発達に結びついた純粹に生理学的・解剖学的なプロセスであるのだが、他方、こうした物理学的なプロセスには還元されない「意味」(NA, 188)をも備えているのだ。

このように行動とは、物理的であると同時に意味であるような「二重の現象」である。この二重の現象は、時間的なレベルでは二つの矛盾した「意味＝方向 (sens)」をはらんでいる。一方で、行動パターンは、発達の初めから全体的なものとして身体に働きかけるのだが、動物自身はすぐには身体全体を統御できず、それにしだいしだいに順応していかなければならない。他方、この全体的

な行動パターンが身体に広まっていくにつれて、各部分は固有な存在を獲得し、分化していく。こうして最終的に行動は、諸機能の束と考えられることになるだろう。このように、行動の構造の発達のプロセスは、一方では全体的な原理に統御されているが、そのプロセスは同時に部分への分化、すなわちこの全体性の隠蔽のプロセスでもある。

生とはそれが実現するかぎりにおいておのれを隠す。全体性の支配が広がるのと同時に、この全体性は、明確に区別された諸部分の組織化として表れてくる。最終的な並列状態は、初めの統合から結果するのである (NA, 194)

ここで「生 (Vie)」と呼ばれている二重の現象こそが、メルロ＝ポンティがコグヒルとともに主題化しようとする現象である。それは支配が広がるにつれておのれを分化させ、みずからの作用を隠蔽していくような全体性の運動として記述される。言い換えるならば、有機体は、諸部分の分化と内的統合という二つの側面をはらみながら、外部環境との境界を動的に組織していくのである。有機体の行動とは、まさに内部と外部の境界において生起する出来事のことであり、生とは、この個々の出来事にその都度「意味」を与えるような「領野 (champ)」 (NA, 200) のことなのだ。

この全体性と諸部分の複雑な関係にどのような地位を与えるかということが、コグヒルの実験の提起する哲学的な問題である、とメルロ＝ポンティは明言する (NA, 202)。はたしてこの問いに彼はどのように答えようとしているのであろうか。どのように「非唯物論的ではないような解決」(前出)をもたすことができるのだろうか。

3. 脱中心化のシステムとしての生

さて、コグヒルをはじめとする現代生物学に内在する哲学的な問題を検討するに際して、メルロ＝ポンティは二つの誤謬を避けようとする。

一方で、現代生物学は、生を解剖学的な諸部分の加算的な集合としては説明できないことを明らかにした。さまざまな部分を方向付けてくれる集合的かつ時間的な原理を、なんらかのかたちで仮定しなければ、生の現象を主題化する

ことはできないのである。

にもかかわらず、この原理をエンテレキー、超越的な理念や本質など、ポジティブな (positif) 原理として立てることも避けなければならない。たとえば、H. ドリーシュのエンテレキーなるものは、それ自体では何であるかを規定することはできず、間接的にのみ証明できるような原理であり、その機能も、物理的な作用をいわば「中断」させること、つまり「力学的なエネルギーをポテンシャルなエネルギーに変換すること」(NA, 300) であるにすぎない。

おそらくこのエネルギーという比喩も不十分であろう。フランソワ・メイエを援用してメルロ＝ポンティが強調しているように⁷⁾、生物が熱力学の法則に逆らうように見えたとしても、それは局地的な現象である。エントロピーの減少はつねにその増大と組み合わされているため、生物の特異性を説明するために非物理的な要因を持ち込む必要はない。生物はけっして「化学的・熱力学的・サイバネティック的には因果性の断絶」(RC, 176) をもたらずものではないのだ。にもかかわらず、こうした因果性によって生を説明することもできない。だからこそドリーシュ自身、最終的には生を「さまざまな否定の複雑なシステム」(RC, 173) と規定するに至ったのである。

したがって、生とは「否定的な原理」である。有機体の生成は、あくまで実在的な対象の連鎖として現れる。しかし、生のプロセスは顕在的な対象たりえず、いわば諸対象の間において作動し、その分化のプロセスを方向付け、新たな行動に「意味＝方向」を与えるのだ。

分化していく諸器官は、有機体の生成の痕跡であり、行動についての科学は、この痕跡の「意味＝方向」の解説の学である。このことをメルロ＝ポンティは、「動物の発達はいかなる舟にも結びついていない純粋な航跡 (sillage) のようなものだ」(NA, 231) と表現している。海に残された航跡は、水以外のものではありえないが、水とは違った何かを指し示している。しかし、この航跡を解説することによって見いだされるはずの舟はどこにもない。それは、意識に現前するポジティブな概念に関係する記号ではなく、不在者の生成を指し示す記号なのだ。こうした記号をどのように解説すればよいのだろうか。われわれは、少なくとも一度は、この航跡が描く時空間的な「渦巻き」(NA, 204) のうねりに身をゆだね、生物とともに知覚し、その分化や統合のリズムと共振しなければならぬのではないだろうか⁸⁾。いまやメルロ＝ポンティのこの試みの哲学的な意味を検討しなければならない。

1) おのれを否定する否定性

生の原理が否定的な原理であるとしたら、それはどのような否定性であり、どのような役割を持っているのか。これが第一の問題である。

この問題をメルロ＝ポンティは、コグヒルとゲゼルの行動概念を紹介したあとで論じようとする。

有機体の行動が「未来へのレフェランス」を備えていること、それはむしろ未来が実体的に現在の有機体に含まれていることを意味するのではないし、それが実際に思考されているというわけでもない。すでに述べたように、現象として観察されることは、たんに複数の現象が競合しあい、そこになんらかの理由によって不均衡 (déséquilibre) が生じること、そしてその部分的な不均衡をあたかも解決するためかのように行動が発明され、新たな構造が成立するということである。たとえば、陸上に上がったばかりのアホロートルのたどたどしい歩みを考えてみればよい。

有機体が、内的発達過程で、ある新しい環境に遭遇するとき、それまでの行動の均衡は危機にさらされる。こうして生じる不均衡は、「作動する非存在 (non-être opérant)」(NA, 207) であり、それによって有機体は現在の位相にとどまることができなくなる。この「作動する非存在」が未来の行動の「スタイル」(NA, 239) を「素描」(前出) しているのだが、こうした素描はあくまで素描であり、まったく障碍に遭遇しないようなものではない。それはつねに物質や身体の「惰性 (inertie)」をはらんだ「有限な生の跳躍」(NA, 208) である。行動のスタイルは、こうした物質や身体の表面において、「凹み (creux)」(NA, 207) ないしは舟なき航跡としてのみ、素描されているのである。

このように行動の発達は、内在的な合目的性と物質の惰性、相対的な均衡と発生する不均衡という二つの側面を持つ両義的なプロセスである。したがって、秩序や構造の成立について語る場合に、ある混沌とした物質の総体に外からなんらかの原理が働きかけ、それを秩序づけるという考え方は、徹底的に避けなければならない。そのためには、カオスと形式化、質料と形相、生物学的合目的性と物理的因果性などといった対立を乗り越え、両者を媒介する第三の作用を主題化する必要があり、たんに両者を曖昧に混ぜ合わせるのでは不十分である (NA, 239)。この視点から考えるならば——現象的なないしは現象学的に——第一に主題化すべきものは、ある不均衡の到来と、そのまわりに組織されつつある新たな構造の、内的な接合 (articulation) というプロセスである。こ

の接合はある時は相対的な均衡を支えるものとして現れ、ある時は不均衡の要因ともなる (cf. NA, 332)。このように、生の原理とは、ある時はおのれを否定して構造を支え、ある時は自己媒介的に生成して構造を揺るがす否定性のことなのではないか。均衡と不均衡と呼ばれているものは、この動的なプロセスを実体的・静態的に捉えた、二つの側面なのではないか。

このことをメルロ＝ポンティは次のように要約している。

否定的原理とは、自己との同一性であるというよりは、自己との非差異である。この不在が要因となりうるのは、自己自身の否定性の否定によってにすぎない。それは生物における多の統一であるというよりは、多の諸要素のあいだの癒着 (adhésion entre les éléments du multiple) である。ある意味では、多しかない。そして、発生する全体性は、潜在的な全体性などではなく、ある種の次元の創設 (instauration d'une certaine dimension) なのだ。(NA, 208)

均衡のなかに発生する否定性は、おのれの作用そのものを否定し、自己を隠蔽しながら作動する。メルロ＝ポンティが指摘するように、この否定性は、自己同一的な存在を否定した非実在性ではない。また「絶対的なものは主体である」と語った、ヘーゲル的な主体に至り着くような「否定的なものの労働」でもない。ここで彼が主題化しようとしているのは、ある「他の次元」が、そのまわりで「創設」されるような不在の特異点である。この特異点のまわりでこそ、複数の要素は競合し、相互に「癒着」し、新たな次元を自己媒介的に到来させる。メルロ＝ポンティの表現を借りるならば、否定的な原理としての生は、均衡と不均衡の間に「均衡化作用を書き込むもの (inscription de l'équilibration)」(NA, 332) なのであり、この均衡化作用が、統合と分化、秩序と無秩序の共通の源なのだ。そして、この書き込みの「意味」が、ある時は多様性の現れとして、ある時は全体的な行動として、知覚されると同時に解読されるのである。

したがって、否定的なものは、たんなる実在の欠如ではなく、「二重化されたもの (dédoublé)」(VI, 316) であり、欠如であると同時に豊かな発明の可能性をもはらんでいる。なぜならば、欠如でもあり、過剰でもあるこの動的な場においてこそ、有機体は新たな行動を発明し、不在を顕在化し、見えないものとしての生を見えるようにするのだから。このようにして有機体は、おのれの規

範を、みずからの行為において「制度化」していくのである。

この奇妙な否定性を主題化するため、メルロ＝ポンティはそれを「偏差」「襞」「移行」(ホワイトヘッド)などと言い換えている(NA, 208)。行動の構造とは、動的な偏差のシステムであり、均衡とはこの偏差が自己を二重化して隠蔽している、偏差ゼロの状態を指す。不均衡とは、この偏差が局地的な非決定性として、ずれとして現れている状態を指す。このように、否定が作動する場を、同一者とその差異、存在と欠如の対立から考えるのではなく、それらの二重化とずれから出発して考えること、そしてこの二重化とずれの哲学的な意味を探ることによって、「対一象 (ob-jet)」概念そのものを存在論的に再考すること(NA, 332)、それこそがメルロ＝ポンティの課題なのではないだろうか。こうしてメルロ＝ポンティは、「否定性の効果 (efficacité de la négation)」を、同一者の力を借りずに、それ自体で思考しようとしていたのではないだろうか⁹⁾。

「偏差」「襞」「移行」といった用語は、メルロ＝ポンティの晩年の思想を知る者にとってはなじみのものであるが、こうした用語によって彼は、否定性がたんなる実在性の欠如や形而上学的な潜在性ではなく、実在性以上に実在的な存在にも関係する「二重化されたもの」であることを表現しようとしているのであろう¹⁰⁾。否定性は「問いかける存在 (être interrogatif)」(NA, 206)という過剰な場に内的に連結している。この不在と存在、欠如と過剰の内的な連結とずれにおいてこそ、生はひとつのプロセス、ひとつの出来事として生成するのだ。すでに自然講義においてメルロ＝ポンティは、この存在のことを「肉 (chair)」(NA, 271, 286)と呼んでいる。

2) 階層構造から起源なき脱中心化のシステムへ

新たな「次元」はまさにこの「肉」という「間世界 (Entremonde)」(NA, 268, 271)において書き込まれていく。肉とは、新たな次元の創設の根拠である。この意味を確認しなければならない。

すでに上の引用でも述べられているように、到来する新たな構造は多を統合する一と混同されてはならない。別の文脈でメルロ＝ポンティは次のように述べている。

有機体であろうと動物社会であろうと、問題になるのは不安定でダイナミックな均衡である。そこにおいては、乗り越え (dépassement) というものはすべて、すでにひそかに存在している活動を取り上げ直し、それを脱

中心化することによって変形するのだ。そこから特に結論として言えることは、種相互および種と人間との関係を階層的に考えるべきではないということである (RC, 136)

この指摘は、下位のシステムと上位のシステムの問題として一般化することができよう¹¹⁾。下位システムを「乗り越える」と称する上位システムは、下位システムを統合し、多を一において否定＝廃棄してしまうようなシステムではない。反対にそれは、有機体の諸要素を取り上げ直し、それを脱中心化することによって、諸部分の間に、内的な「共振 (résonance)」(NA, 255) を打ち立ててくれる境界として機能する。この内的な境界付けの働き (circonscription) によってこそ¹²⁾、これまで競合していた諸要素は、相対的に平衡状態に入り、新たな行動の発明を準備することになるのだ。

こう考えるならば、新たな次元の到来とは、多を統合して廃棄してしまうのではなく、むしろ多を多として肯定するような境界の創設のことである。だからこそメルロ＝ポンティは「ある意味では多しかない」(前出) と述べることができる。にもかかわらず、この多を内的に区切り、境界づけるある水準が到来する。

生とは分離可能な事物ではなく、囲い込み＝備給 (investissement) であり、特異点であり、存在における凹みであり、存在論的レリーフであり、不変項であり、横断的なものである (・・・)。それは別の次元の現実のポジティブな原理ではなく、諸偏差がそのまわりに配置されるような水準なのだ。
(NA, 302、傍点筆者)

こうして生は、諸存在を包囲し、脱中心化すると同時に新たに中心化するような、二重の境界のシステムとして定義される。行動とは、この境界を内側から二重化すると同時にずれてゆかせる作用のことなのだ。ただしこの場合、生の現象としてわれわれに与えられるものは、システム内のトポロジックな自己差異化だけ、内的な境界の自己媒介作用だけである。つまり、ある上位の真理の名の下に新たなシステムが要求されるわけではなく、今ココにおける局地的な相克を解決するためにミクロな諸現象が「側面的に絡み合い (empiètement latéral)」(NA, 303)、その不在の中心の回りに新たなシステムが到来する。要するに、生というシステムは、自己を差異化し、内部と外部を分離すると同時

に結合する二重の境界 (cf. VI, 287) として作動し、—— 古典的な絵画のような —— ポジティブな輪郭線としてはけっして現前しないのである。

3) 間接的存在論へ

このように、メルロ＝ポンティは生というシステムを、作動する諸境界からなる構造として記述していく。もはやマイクロとマクロ、下位の要素と上位のシステムを対立させることはできない。すべての視点は等価である。存在論的な区別があるとするならば、それは上位システムと下位システムの間ではなく、自己差異化するシステムと間世界 (肉) の間なのである¹³⁾。この中間地帯においてこそ、生という否定的な二重化原理が作動する。否定的なものは、「存在の蝶番」(NA, 301) として、現象の「構造」を支えているのだ。

しかし、メルロ＝ポンティは、いったいなぜ多数の構造における局地的な不在の現れを記述するだけでなく、間世界的な肉や「存在」を語らなければならないのだろうか。これが最後の問題である。

その理由のひとつは、自分の立場を—— 経験的ないしはカント主義的な —— 相対主義と区別するためであろう。事実、さきに引用したフランソワ・メイエは、議論を方法論的な次元にとどめている。

メイエの分析は、フッサールの階層分析に基づく「ポジティブな現象学」であるが、暗黙のうちに規制的一構成的、現象一物自体というカント的区別を前提している (NA, 332-336)。彼においては、現象概念そのもの、対一象概念そのものは問題視されることはない。

それに対してメルロ＝ポンティはさらに先に進み、新たなシステムが到来する「間世界」そのものの存在論的な意味を探ろうとする。『見えるものと見えないもの』に転記されている、「階梯 (Echelle) —— この概念の存在論的な意味」と題された草稿ノートの中で、メルロ＝ポンティはメイエの問題を取り上げ直し、メイエの考えはたんに現実視点によって異なった様相をみせるという相対主義にとどまるべきではないと主張する。これは暗に「ある大きさの比率に従って即自的な平面に関係する即自的な存在」(VI, 280) を想定することになってしまうからである。それらの視点の「共通の骨組」であるような一般的な実在を主題化しなければならない。

理解しなければならないことは、さまざまな階梯の「視点」は投影でないこと (・・・)、実在とはそれらの共通の骨組、核であって、それらの背

後にあるような何かではないということである。それらの背後には、また他の「視点」しかなく、これもまた自己とその投影という図式で考えられている。実在はそれらの間にある。(VI, 124)

誤解してはならないが、諸現象の間にあるこの実在は、その多数性を排除するものではない。現象としてわれわれに与えられるのは、均衡と不均衡、部分と全体、否定と肯定などを逆説的に結びつける境界の作動だけだからである。現象の多数性とその癒着関係を考慮し、そこに生起する出来事にふさわしい視点を取ることによって、この存在に生じる不均衡・部分・否定などが「原理上ある外部を持っている」(VI, 281)が示されなければならない。このように出来事がある「垂直的・次元的存在」(NA, 280)と内的に接合し、部分と全体、否定と肯定、多と一が内的に共振するような場を主題化することこそが、メルロ＝ポンティの課題なのである。こうした場においてのみ、相対的な進歩の意味と歴史的な方向性を語る可能性が開けるのだ。

このようにしてメルロ＝ポンティは、たんに経験的ないしは現象学的に多様性を記述するのでもなく、反対に超越的な統合原理を要請するのでもない、第三の立場をひとつの存在論として模索している。この存在論は——二重で否定的な——境界付けに基づく「さまざまな布置の建築物」(VI, 281)を内側から記述することによって、それらをそのつど内側から外部に開いてやるような作業を要求する。たとえば動物の例で言うならば、メルロ＝ポンティは発達しつつある動物の「視点」に身を置き、そこに生起する出来事を内側から記述しながら、肉と呼ばれる全体的な生の地平に関係づけていく。問題は動物の視点に完全に同一化することでも、人間的意識を動物に投影することでもなく、また動物の現象の人間に対する意味を外部から記述することでもない。それは「人間と動物性の側面的な結合」(NA, 306)において、見ることと解釈すること、感覚することと語ることがひとつであるような、新たな哲学的言語の可能性を探ることである。その時、動物性は「感性的世界のロゴス」(NA, 219)としてわれわれに現れてくる。「無言のコギト」が語り始めることができるのも、その時なのかもしれない。

このような動物と人間の関係の分析の場合だけではなく、あらゆる階層的思考は放棄されなければならない。おそらくは、自然や生という概念すら、暫定的な出発点でしかないであろう(RC, 125)。それは「ピュシス—ロゴス—歴史という系列」(NA, 259)において、はじめて十全な意味を持つ。事実、動物に

ついでに講義は、人間の身体における「感性的世界のロゴス」の探求へと延長されようとしていた¹⁴⁾。

強調しておかなければならないが、メルロ＝ポンティは階層的な思考の放棄のためにこそ、あえて階層的な記述に従い、それを解体していくことによって、さまざまな構造が共存しながら拮抗し、脱中心化しながら二重化していくような場を主題化しようとしていた。存在とは、語り得ぬ神秘主義的な起源などではない。そもそも、間接的存在論にとっては「もはや、諸起源の問いも諸限界の問いもない」(VI, 318)のだ。

根元的なもの(l'originaire)に訴えることは、複数の方向に向かう。根元的なものは分裂する。そして哲学はこの分裂、この非一致(non-coïncidence)、この差異化＝微分化(différentiation)に付き従わなければならないのだ。(VI, 165)

4. 制度の間接的存在論

メルロ＝ポンティのこの試みは、彼の死によって無残にも断ち切られてしまった。彼の晩年の営みを更新しようとする努力はつねにあらたに繰り返されなければならないし、それを引き留めるあらゆる批判は反動的である。彼の言語論の弱さを、構造主義的・フーコー的な身ぶりで指摘したり、彼の自然概念を脱構築していればよかった時代は、とうの昔に過ぎ去ってしまったのだから。

われわれは肉の概念を制度化の概念と相互補完的に理解することによって、自然の概念を形而上学的な解釈から解放しようとしたことがある¹⁵⁾。人間的な意識は、まさに「制度化として、一種の行動として」(NA, 220)自然に到来する。この到来のプロセスを系譜学的にたどらなければならない。そのためにこそ、自然のほうも「肉的な実在(réalité charnelle)」である構造(NA, 286)として、捉え直されなければならなかったのだ。

また、ジェラルド・シモンソンは、メルロ＝ポンティが脱中心化と偏差という言葉で語ろうとしたものを、「位相のずれ(déphasage)」という用語で思索する。シモンソンにおいては、自己制度化の問題は、「技術的対象」の「個体化」の問題として考えられている。技術とは、システムにおける自己制度化のプロセスそのものである。この視点からすれば、動物がそのつどの環境において行動を「発明」し、器官を分化させていくプロセスは、一種の「器官学＝装置学

(organologie)」の枠組みで考えられることになるだろう¹⁶⁾。

「身体の政治的テクノロジー」の系譜学をめざすミシェル・フーコーの分析は、技術における個体化の分析者としてのシモンドンと、制度における生成の分析者としてのメルロ＝ポンティの、延長上に位置づけることで、その哲学的射程を明らかにすることができよう。『監獄の誕生』における「権力 (pouvoir)」論は、メルロ＝ポンティの制度分析のみならず、生の時空間的な現象や否定性についての分析とも類比的にとらえられると思われる。フーコー自身が、やがて「生-権力 (bio-pouvoir)」の分析に向かったのは、おそらく偶然ではあるまい¹⁷⁾。

いずれにせよ、古典的な観念論の階層論に対置されるべきものは、ホーリズムや共生といった平和的なヴィジョンではありえない。メルロ＝ポンティは、存在を、制度の中でつねに現れてくる不均衡から出発して——つまり諸部分に内的に結びついたものとして——間接的に思考し続けることをめざしているのだ。メルロ＝ポンティの哲学は、安易な自然回帰に対しても、強靱な論理を突きつけてくれるであろう。

註

- 1) メルロ＝ポンティの著作の引用に際しては以下の略号を使用し、その後に頁数を記す。
RC : *Résumés de cours, Collège de France 1952-1960*, Paris, Gallimard, 1968.
NA : *La Nature, Notes, Cours du Collège de France*, établi et annoté par Dominique Ségler, Paris, Seuil, 1995.
VI : *Le Visible et l'invisible*, suivi de *Notes de travail*, éd. Claude Lefort, Paris, Gallimard, 1964.
- 2) 高橋哲哉「『自然』のミトロジー」、『逆光のロゴス』未来社所収、一〇九頁。ミシェル・セールの「自然契約」論も、たとえばルクレティウス論における丁寧な議論から出発して理解するならば、われわれの議論と交叉することであろうが、ここでは立ち入ることはできない。『ルクレティウスのテキストにおける物理学の誕生』、豊田彰訳、法政大学出版局、とりわけ「暴力と契約」の章参照。
- 3) 同書、一四〇頁。こうした批判はけっして目新しいものではなく、メルロ＝ポンティの死後のサルトルの追悼文やティエットらの研究書の立場を反復したものにすぎない。Cf. *Merleau-Ponty* in *Situation IV*, Paris, Gallimard, 1964 ; Xavier Tilliette, *Merleau-Ponty ou la mesure de l'homme*, Paris, Seghers, 1970 ; André Robinet, *Merleau-Ponty*, P. U. F., Paris, 1963. 実存主義者とカトリック思想とマルクス主義者と脱構築派がそろって同じ批判をしてしまうこと、

そのこと自体は時代の問題と片づけてしまってもよいが、それらが立つ共通の地平を暴き出す、という作業がわれわれ自身に課せられることになる。

4) 同書、一四〇頁。

5) 編者自身この書を「メルロ＝ポンティの未公開の書物」ではないと明言しているが(NA, 19)、それにしてもその編集は粗雑である。まず、講義の年度によって、聴講者のノートが再録されたり、メルロ＝ポンティ自身のノートが転記されたり、両者が参照されたりするなど、ソースが一定していない。また、メルロ＝ポンティ自身のノートについても、262頁のオリジナルと比較してみればおわかりの通り、アンダーラインなどは断りなく無視されている。また、参考文献についての指示も、それがメルロ＝ポンティの指示によるものなのか、編者の調査によるものなのか、はっきりしない。たとえば262頁のオリジナルでは、引用された書名はメルロ＝ポンティ自身によって記されているが、編者はこれを編者註に取り込み、頁数などを付加している。また、270頁以下の「第一、第二……の下書き」という表現も、その根拠が示されていない(頁付けが重複しているということか)。こうした形式上の問題点にもかかわらず、われわれはこの書がメルロ＝ポンティ自身の意図を十分に伝えていると判断した。正確な理解のためには、講義要録がつねに参照されなければならないのは言うまでもない。この書に対し、*Notes de cours, 1959-1961, établi par Stéphanie Ménasé* ではしかるべき文献学的配慮がなされている。

6) われわれはすでに別のところで、ユクスキュルやローレンツを取り扱った箇所について論じたことがあるが、それはNAではなく、筆者自身が参照したメルロ＝ポンティの未公開ノートに基づいている。「まなごしの到来と自然のシンボリズム」、『メルロ＝ポンティ研究』、創刊号、四八～六二頁。本稿はこの論文で提起した問題を、新資料に基づいて、まったく異なった角度から論じたものである。

7) Cf. François Meyer, *Problématique de l'évolution*, Paris, P. U. F., 1954. 後にその一部を見るように、この書はVIの草稿ノートでもしばしば引用されている。

8) 渦巻きはヘーゲルに由来するとされる(NA, 204)。多数化(増殖)や分化のリズムを波にたとえる比喩の意味については、三木成夫『胎児の世界』、中公新書691、一七六頁以下を参照。だがわれわれの課題はこうした比喩の生物学的根拠を探ることにあるのではなく、反対に生物学的な分析から出発してその哲学的な意味を精密化させることにある。

9) 生物自身が制度化する規範(norme)とその崩壊の関係については、おそらくジョルジュ・カンギーレムの *Essai sur quelques problèmes concernant le normal et le pathologique* (1943), in *Le normal et le pathologique*, rééd. P. U. F., 1966 が参照されている(NA, 199)。カンギーレムがnormal(規範的なもの)とnormativité(規範性)を区別を語るのに対して、メルロ＝ポンティは規範と非規範のずれから出発し、規範の存在論的な根拠を暴き出そうとしているように思われるが、この点についての詳細な検討は別稿にゆずらざるをえない。

10) ジル・ドゥルーズの言葉を借りるならば、ここで作動しているのは、「顕在的

(actuel)でないのに実在的」であり、「異化=分化 (différencié) していないのに、差異化=微分化 (différentié) して」おり、「全体的 (entier) ではないのに完全 (complet) である」ような理念なのである。Cf. G. Deleuze, *Différence et répétition*, Paris, P. U. F., 1968, p. 276 (邦訳、『差異と反復』、財津理訳、河出書房新社、三二二～三二三頁)

- 11) 階層的な思考の批判は VI の各所でも展開されている。たとえば VI, 277 では、次元、接合、水準、蝶番、軸、布置といった概念の導入の必要性を語った後、「上位の次元への移行=意味の根元的創設 (Urstiftung)。どのような意味で上位の構造は所与の構造において準備されているのか」が問われている。他に、VI, 130, 292, 306, 319などを参照。
- 12) 「ゲゼルは身体を一種の空間の境界付けとして規定する。ローマの占いが神聖で意味を持つ輪郭を描いていたのと同様に、有機体はひとつの *templum* を規定し、そこにおいてこそ出来事が有機的な意味を持つことになる」(NA, 195)。templum とは、語源的には「区切り」を意味する。これはおそらくカッシーラーの『シンボル形式の哲学』(岩波文庫、(二)、二〇四頁)における、神話的な象徴の分析に基づく。メルロ=ポンティはここで、カッシーラーから出発し、神話的な思考や動物性に新たな意味を与えようとしているのであろう。次註参照。
- 13) この問題についてメルロ=ポンティは、『行動の構造』においてすでに、行動の「下から上へ」という分析が二重であること、つまり「下位から上位を解放する」とともに「上位を下位のうえに『基礎付ける』」必要があることを強調していたし (*La Structure du comportement*, P. U. F., Paris, 1942, p. 199)、『知覚の現象学』では、象徴的機能の形式と質料の関係について、それらが相互的な基礎付け (Fundierung) の関係にあることを示そうとしていた。そこで彼が提起している現象学的な問題は、こうした「さまざまな象徴形式間の関係」の問題である。この問題の解決は、メルロ=ポンティの現象学をカッシーラー流の批判的観念論から区別するために必要であり、非常に重要だと思われるが、『知覚の現象学』ではこの両義的な関係は、人間的知覚の時間的弁証法の両義性にいわば解消され、未解決のまま残されてしまったかのようにも見える (*Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945, pp. 147-148)。ここにこの書の人間主義を語ることもできよう。初期のメルロ=ポンティは、生の現象学の問題を主題化しなかったのだ。自然の概念についての講義の時期には、メルロ=ポンティはいわばこの悪しき両義性を自然や動物の次元にまで遡ることによって再考しようとしていたのではないか。こうして上位と下位の関係の問題そのものをずらそうとしていたのではないだろうか。この点についての厳密な検討は、パリ第一大学博士号取得論文 *Problématique de l'institution dans la dernière philosophie de Maurice Merleau-Ponty*, 1993 ; Lille-Thèse 1993 (microfiche)で行なった。
- 14) この点に立ち入ることはできないが、身体論については、フロイト主義との関係がむしろ重要である。また『知覚の現象学』では「現象的身体」と端的に対立させられていたかのように見えた「客観的身体」が、すでに講義において「ひとつのミクロな現象」と捉え直されていることにも注目すべきであろう (NA,

278)。VIでは、「私の身体は、同時に (d'un seul coup) 現象的身体と客観的身体」であり、それらは身体の二つの「側面」であると言い換えられ、結局これらの用語は放棄されている (VI, 179-180)。

15) 筆者前掲論文「まなざしの到来と自然のシンボリズム」参照。

16) Gérard Simondon, *Du mode d'existence des objets techniques*, Aubier, 1958, 1969, 1989, préface de John Hart, postface d'Yves Déforge. また拙稿「生成する機械の身体」、『現代思想』、青土社、1996、vol. 24-8、pp. 171-181を参照いただければ幸いである。

17) この点については、拙稿「ヘテロトピアのまなざしと制度の身体」、筑波大学『言語文化論集』44号、1997年、pp. 127-140を参照。